

平成十七年一月二十日 最終講義

## 私の仏教福祉論

志 田 利

みなさん、こんにちは。中山学部長先生に過分なお言葉をいただきまして、誠に恐縮です。ここに立たせていただいて、とても私緊張しています。このような晴れがましい場面を私のような者にご用意していただいたことを誠に有難いと思っています。それとも一つ、お分かりになりますでしょうか。今日、私が着ている背広です。実は、妻の洋子が今日は晴れの舞台だということで、特別注文してくれました。二日前にやっとデパートからといてまいりました。ありがたいことです。これも嬉しいことでございますけども、うちの娘が東京に住んでいるのですが、実は今朝早く支度して二才の孫を連れて来てくれまして大変嬉しい限りです。

〈身延山への期待〉

そんなことで少し緊張気味でございますけれど、せっかくの機会でございますので今、中山先生からお話がありましたように、この四月から新たに仏教福祉学科が出来るという本学に少しでもご参考になればと思つて立たせていただきました。お手元にレジュメのようなメモを用意してきましたけれども、私はもともと、先程ご紹介いただきましたように、身延山というところには無縁でございます。静岡県の県庁勤めをしておりました。出身校の日本社会事

業大学の三浦学長から、お話がございまして、「身延山大学で福祉コースを設ける検討をはじめらう。お前、少しお手伝いをしなさい」と、こういう言葉を承りました。所属している学会の学会長でもありますし、懇意の方でもありましたので、それでは、と思っていました時に、本学の学長でありました中條先生からも懇篤な誘いのお言葉をいただきました。当時、私は静岡県庁で、保育所の運営指導などの行政を担当する、児童課の課長職にあつたもので、それから、厳しいと思つたのですが、それでも、お手伝いすることになった経過がございします。その根つこのところで、私なりの思いがございします。実は、福祉の世界で私は半世紀、五〇年ばかり仕事をやってきて、その間に大きな変革があつたという実感をもっていました。ある意味社会構造そのものの変化ではないか、ということ、かつて戦争に負けまして、日本の国は大変貧しかった。何も無い、その中で大陸から引き上げてきた兵隊さん、それから満州開拓義勇軍と言つて、国のためと満州で開拓をした方がみんな日本の国に戻ってきました。何も無いところで受け入れて、みんなで貧しい中で協力し合つて、生活を立て直していこうという、連帯感というものがみなぎつていたような感じがいたします。私が山形県で社会福祉協議会という場にいましたときが、そうでありました。その当時大変印象的でありましたのは、どこのお寺さんでも自分の寺院の境内を解放して、開拓の人たちの子どもさんを預かる、いわゆる農繁期託児所というものを設けてくれていた、ということであります。それが、日本の国は高度成長の中で福祉国家ということが段々言われるようになりまして、福祉の仕事は国の責任で行うという形になつて参りました。そうすると、今までお寺さんがやっていた保育所のようなものも含めて国が税金でやるのだ、という風に段々世の中のがかわり福祉というものは、自分の責任ではなくて国の責任でやるもの、という認識が強まつたような気がいたします。

## 〈福祉改革と地域の時代〉

私も地方の福祉行政におりました中で、どうやって国の予算を持つてくるかということが最大の課題でありました。そしてまた、戦後の展開の福祉の仕事は、仏教・キリスト教といったような信仰・信念を持つて、奉仕をするという考え方をもとはじめた方々が多かったのであります。けれども、次第に福祉の仕事も国が、大変補助金等の手当てを出すようになりましたから、どうも福祉の仕事はうまみのある仕事と思う方が増えて参りまして、社会福祉法人という法人もそこから利益を上げるというような気配があります。老人のこと、子供のこと、障害者のこと、みんなお国の責任でお国からいただいた金で運営するものというようなイメージとなったような動きがございます。それが昭和の末期になりますと、限界が見えてきました。国がもう税金で賄えない、借金が増える、ということになってきました。「年金・医療や福祉という事業もできるだけ、みなさん自己責任でやってください。」というような福祉改革と地域の時代への流れが最近の傾向であります。その象徴が、平成九年の介護保険制度です。税金で半分、保険料で半分ということとで出来るだけ国の負担を少なくしようという流れがあります。戦争で負けた後の時のように、みんな地域の中で協力し合って出来ることはやろう、という考えが段々出来たというのは、私なり感じであります。私にこちらの大学からお声をいただいた時が、まさにそういう時でした。地域の福祉という言葉が使われるようになったのです。お互いにコミュニティの中で協力し合って、支え合って、豊かな暮らしを作っていこうという、国がすべてやってくれるという時代から、ずっと流れが変わって来たわけです。家族関係も大変弱い中で、それを昔のように協力していこうといいますが、なかなか難しいことです。しかし、福祉の世界ではそれをやらないと、もうまかなっていけない状態だというわけですね。身延山大学というお話があった頃、私なりに思いました。地域の中で新しい

組織をつくっていくとするならば、それはどこの地域、どこの集落に行っても存在するお寺だ、そこで大変教養豊かな信頼される存在である住職さん、その方々に福祉の領域に関心を持っていただけるのなら、日本の国も新しい意味での福祉の方向というのが出てくるのではないかという風に考えたわけです。身延山大学でお坊さん方に福祉の勉強をしていただいて、そして福祉に強いお坊さんになっていただく。そのためお手伝いが出来れば、私も少しは役割になるのではないかと。こういう風に考えたのが、原点でありました。それがいろんな経過もございまして、まずお坊さん養成の四年生大学にすること、福祉コースのことは後回しという流れが出て参りましたことは、みなさん御承知のとおりです。その中でも、仏教実践研究ということで、何としても、福祉講座を置きたいということで、ご注文をいただきましたので、その後ずっと関わらせていただいたというのが今日までの経過です。私も県庁勤めの後に、特別養護老人ホームという所で園長をしばらくやっておりました。そこはキリスト教のシスター達が主役をつとめている老人ホームです。その中で、いろんなお年寄りに関わって行く中で感じたことは、昔は老人ホームと言いますと、全く身寄りのない、子供もいない、自分の家もない、財産もないという方のお世話をすると、これが一般的でありました。ところが実際に老人ホームに行ってみますと、私が関わったときでも九〇人のお年寄りのなかで、全く身寄りがいない方は一人でした。あと、ほとんどの方に子供がいる、孫がいる、兄弟がいる、という方々ですけれども、面倒を見てもらえない、という理由で老人ホームへ身柄を寄せる方々がほとんどでした。できるだけ入所するときにお話を伺いました。一様におっしゃるのが「老人ホームには入りたくない、しかし嫁に言われたから、しょうがない。」というような方々でありました。みなさんご承知のとおり、施設というのは、集団生活であります。もう少し朝ゆつくり寝たいと思っても、そうはいきません。テレビをもう少し見ていたいと思っても、これは決まっ

た消灯時間があります。そういうことで、なかなかプライバシーというのには保ちにくいという点があります。一生懸命お世話をするのですけれども、お家にいらつしやった状態みたいになかなか保てない。したがって、そのおばあちゃんたちの願いは出来れば自分の家で最期を迎えたいということなのです。老人ホームにいてつくづく思ったことです。誰もいない、家族がいない方だと仕方ないですけども、家族がいる方は、家族と一緒に出来るだけ生活を共にする状態にする、これにはどうしたらいいのだろう、ということです。やっぱり我々は原点に戻って両親を大事にする、先祖を大事にする、そして周りの方と共存するという仏教の考え方を日本の社会の中で考え直してみる、家族で年寄りの面倒を見るのがあたりまえという考え方を基礎にした家庭づくり地域社会づくりというものがもし可能ならば、これはおばあちゃんが老人ホームに入らなくとも自分の家で長らえることが出来る可能性もでてくるのではないか、こんな風に思いました。施設にお入りになるよりも出来るだけ在宅でお年寄りが暮らせるような方向に持っていこうというのが大きな流れであります。しかし現実には、なかなか年寄りの面倒をみるという雰囲気はございません。出来るだけ老人ホームに入れて楽をしたいという若い方がこの項目立っているのが現状です。とすると、どうすればいいのだろうか、ということが、今日日本社会全体の中のテーマとなっています。

#### 〈施設から在宅福祉へ〉

福祉の仕事は、どこから始まったのかと考えてみますと、聖徳太子・行基といった方々がおられますけど、これは日本の古代社会の中で、福祉のことを考えてくださった原点にある方々が、みんな実は仏教徒でいらつしやるわけです。大陸から渡って来た仏教の教えを本にして日本の国の中で福祉の仕事を教えてくださった、そして日本の福祉の歴史中ではどんな場面にも出てくるのがお坊さんです。日本の文化の中で福祉の領域で、特に仏教のみなさんが大き

な役割を担っていただいた、これはもう間違いないことです。そういう現実を福祉の歴史の中でみた時に、今改めて地域の中でお互いが助け合って、私たちの生活をもっと豊かにしていこう、自分の足で立っていこうという時に改めて地域の中のリーダーでいらっしやるお坊さん方に期待をしてもいいのではないだろうか、私のまったく勝手な想いです。はじめに身延山にお伺いした時に、今本山におられる依田さんにお車でお迎えをいただいて、日蓮聖人が長い間、ここで修行なさった、このお山の霊山の雰囲気、それがすごく私の印象の中では強く残りました。そしてまた、本山生として行学寮生として仏教の教えを学びながら毎日暮らしの中で、お坊さんになる修行が出来る、実践が出来る、こんなまさに行学二道ということを実際に出来る場、その場で学んでいる学生さんの姿を見ると、とても教育の面からいってもいろんな意味でいいところだなあというのが私の正直な想いです。日本の福祉の世界は、施設よりも地域在宅サービス、そしてみんなで助け合って地域の中で生きていく形を広げていこうという流れがございます。介護保険法の中で大事なポイントとなりましたのは、今まで「あなたは、この老人ホームに入りなさい」「この保育園に預けなさい」といったかたち、行政の命令で入所するというルールでしたが、契約してご自分が選んだ施設に入所する、保育園を利用する、という方向に変わってきたこと、そうすると選ばれる施設、どの施設がいいかと選ばれる時代にこれからなってくると、こう言われております。もう一つは、入所施設の中でもサービスの質というものが問われるようになったことです。実は昭和六十二年に東京で国際社会福祉会議が開かれました。そこで、私も事務的なお世話をしたのですが、その時に世界中から福祉の関係者が集まって、日本の国を見ていただいた中で、ご意見が出されましたのは、日本の国は、戦後大変頑張って福祉の法律をつくり、制度を充実したことは大変素晴らしい。けれども、その具体的なサービスをする職員の方々のレベル・質というものがまだまだではないかと。だいたい国家資

格も専門資格もないではないか、というようなご指摘をいただきました。それで、ときの斉藤十朗厚生大臣が「それは大変なことだ」と「国の恥である」ということで、急遽平成元年に福祉の仕事をする方々にも国家資格を与えようということで、社会福祉士・介護福祉士、外圧でございましたね。よその国から言われて気づいて始まった専門職という意味合いがございます。それにいたしましても、そういうことで福祉の領域では、働く職員の資質をもっと高めてあげようという流れが出来てきたことは、大きな変革でございました。それからもう一つは、先ほど申し上げたように介護保険で契約になりましたから、自分がどのサービスを利用するかということは、本人が選ぶというようになってきます。そうするとボケがかかったお年寄りが、どのサービスが自分にふさわしいかという判断が難しいわけがあります。それではということでは民法の改正がありまして、成年後見制度というのが、介護保険と合わせて誕生したのはご存知であると思います。これは法的ないろんな役割をお年寄りに代わって代行するということがあります。家族がいない時には、今のところ弁護士・司法書士・社会福祉士といったような国家資格を持っているかたが家庭裁判所から指名を受けて役割を担うことになっています。

へ福祉に強いお坊さんを」

お坊さん方が地域の中でご自分のお寺を持ち、そして地域の方々のお世話役の役割を担っていただくわけですけれども、お坊さん方に社会福祉士の資格をもつていただいて、地域で困っているお年寄り、それから障害がある方がいた場合に相談相手になっていただく。となれば素晴らしいのです。お寺さんという立場のある方ならおばあちゃんも安心して相談できる。そして法的な面にも代行してくださるということ。制度は無料ではございません、お世話をいただくこととなっているのです。是非お坊さん方に社会福祉士の資格を持っていただければ。というのが私

なりの勝手なお願いです。中山学部長先生が大変な行動力で来年度から新学科が出来る、仏教福祉学科が国から認可をいただいた。素晴らしい飛躍のチャンスを活かしてほしいと思うのです。今度は介護福祉士・保育士の資格、それから社会福祉士の資格、そしてお坊さんの資格も取れるという形で、大変若い方々に可能性を豊かに持たせる機会をつくっていただいたことは大変有難いことなのです。これから実際に担当をしていただく先生方のご尽力に待つわけですが、この新学科に望むものという形で、私なりをお願いを少し申し上げたいと思います。それはお坊さんの資格を持つて、そして社会福祉士の資格を持つ。福祉に強いお坊さんになるという方々を期待したい。お寺さんは、亡くなった方の弔い、お墓を守るという役割がもちろんありますが、生きている人間の心の癒しの分野でもっと役割を担っていただきたい。特にこれからの日本、高齢化が進んでいきお年寄りが多くなってきました。そういうお年寄りが、家族からなかなか応援してもらえない方々が増えておられます。そういうお年寄りに制度という役割も含めて、自分の身近にあるお坊さんが相談に乗ってくれるならば、地域のみなさんもお寺さんに対する期待がさらに加わるのではないかと、という願いです。お坊さんになる方々が是非福祉のことを勉強される機会というものを、この大学でもっていただけると有難いということです。仏の心をもった福祉人も、それからもう一つは福祉の世界の職員にも仏の心・仏教の精神というものをきちんともって働く。これが期待されます。

#### 〈福祉の心をもった福祉人を〉

今福祉の世界は、先程も述べましたように契約の時代になりました。そうすると、今病院は、腕のいい先生がいるか、親切な看護婦さんがいるだろうか、選ぶときの大きなポイントとなっています。老人ホームなどでも、自分の身の回りを世話してくれる寮母さんが本当に優しい方が、自分の身になっていろいろと介護してくれる、そういう方

がいるか、いないかということを考えて選ぶという時代がまもなくやってくるような感じがいたします。今のところ、老人ホームが足りないということで、「入りたい」という希望が多くあります。ある程度のニーズに答えた状態になりますと、どのホームにしようか、身延荘にしようか、という風に考える時代がもう間もなく来るわけです。施設側でも今、建物を新しくするのも大事ですけども、それよりもそこで働く良い職員、そして良いサービスと評判の良い施設ということが求められると言われはじめています。今年卒業する望月恵太さんが幸いにして、障害のある方々の施設に採用が内定しました。恵太さんは、本学のヘルパー講座も受講していますし、そしてまた、マーヤの会のボランティア活動の場でも一生懸命、中心となって活躍しています。その体験が、実は面接のときに、施設の方が「どうか、仏教の勉強をされた上で、ボランティアの体験もしている」ということで、大変お褒めをいただいたとお世話をされた足利主管から伺ったのです。そういうことで、今施設の中でも、お年寄りの立場、障害者の立場になって考え行動するような職員が欲しいという声が大変増えている、そしてまた保育の世界でも同じであります。子供の相手が出来る、ピアノが弾ける、それから遊びごとが上手いというような、子供の相手が出来る保育士というだけではなくて今、一人っ子を抱えて困っているお母さん、子育てがわからないお母さん、そういう方の相談相手になったときに、アドバイスが出来る保育士さん、これがいまさんと、保育園自体良い評判のとれない状況になっています。私がいくつかの保育園の経営に関わっておりますが、最近園長さん方が、お母さんの相談にのってもらえるような保育士さんが欲しい、という声が大変高いですよ、というお話です。この頃、どこの保育園でも子供を預かるだけではなくて、地域社会の育児に困っているお母さん方の子育て支援という、子育て支援センターの役割を担ってもらおうということが、今対策として進められています。そうすると、専門的な知識をもっている保母さんであるというだけでは

なく、お母さんの悩みにも答えられる保母さんという注文です。このニーズに答えられる職員というのは、今全国に福祉学部をもっている大学が一三〇を越えるという、うちの大学はある意味で後発の大学になりますけども、私の考え方からしますと、この身延山、素晴らしい本山の中で仏教の勉強が出来る、その上で福祉の勉強までも出来るというのは、大変メリットのあることだと思っています。そのメリットの部分を活かして、この大学でいわゆる仏教福祉、単なる社会福祉学科ではなくて、仏教福祉学科というものを設けていただけるという意味合いというものを私はとても嬉しい期待をしているものです。ですから、単なる社会福祉ではなく仏教という冠をつけた福祉学科ということですから、その中身をここの学校は、仏教の教養豊かな先生方が、専門の先生方々がたくさんいらっしゃる。それに新しくこれから福祉の専門の先生方がお入りになるわけですから、仏教の先生と福祉の先生とが一緒になって仏教福祉コースというものをどういう風に、どんな内容で教育するかということがきちんと構築されていったならば、山の不便であるけども、こんな素晴らしい環境の中で教育を受けられるという、私は大変素晴らしい現場の期待に答えられる人材が生まれるのではないかな、という風に期待をもっています。仏の心をもつ介護福祉士それから保育士になる方々が、この学校から輩出することに大いに期待をしたい。私もそういう流れにお手伝いしたいと考えます。私なりにこれまで準備のためつとめたことがいくつかございます。

#### 〈新学科への準備の試み〉

一つは五年ほど前から、ホームヘルパーの養成講座を実施させていただきました。はじめ二級講座を開きまして、それから一級ということで開いたのですが、大学事務局の松木さんと一之瀬さんが頑張つて、身延町とも交渉していただいて、始めたわけであります。地域の方々からも大変評価をいただいて、今日も望月寛さんなど講座を受けられ

た方がわざわざお運びいただいております。本学の高橋一公先生と小川先生の協力をいただいて、土曜日・日曜日という時間帯に開いたのです。今日、お見えいただいた高等学校の高橋智恂先生も講座を受けてくださって、大変広がりを持ちました。そして地域の中からも身延山大学は役立つことをやってくれるということで評判をいただいたことも、大変ありがたいことでございます。このヘルパー講座の延長線上に、介護福祉士の養成というものがこれから出来るということです。二点目は、マーヤの会というボランティアグループが図書館の佐野さんが大変力を入れていただいて、学生さんたちに本を読めない障害のある方やお年寄りの方に本を読んであげる、そういうボランティアをやってみませんか、という呼びかけをしました。それが発展しまして、日蓮聖人も活躍する大型紙芝居をつくって、身延町のお祭りに参加するということに広がっていきまして、身延町長さんから感謝状をいただいたのです。地域の方々に褒めていただくというかたちでございまして、これから福祉で働く方々にはぜひマーヤの会のようなボランティア活動を日常化していただけると大変有難い。という風に願っているわけです。もう一つは足利主管に、会社や公務員といったような場面で試験が突破出来る能力を持つていまして、なかなか社会に進出できません。そこで、ぜひ公務員講座を開いてもらいたいというお願いをしました。それが今日では、社会福祉士の国家試験というものの、これは大変厳しい世界でありまして受験生の中で二割から三割ぐらいが合格率というのが現状です。本学も四年間の勉強の成果をもとにこの国家試験の準備をしないと間に合わないということであります。公務員講座を今度国家試験の準備講座というかたちで新年度からは発展させる、という風にうかがっております。大変ありがたいことでございます。そういう形で今、私どもなりに努力をしたものが少しずつ新学科のステップにつながる形で、出てきているのでございます。新学科が新しい体制の中で社会の期待に応えて大きくなっていただきたい、という風に願っております。で、

もう一つ福祉に強いお坊さんというところで、強調しておきたいと思っていることがございます。実は二〇〇〇年に社会福祉法が出来上がりました、福祉に関する一番基礎の法律でございますけれども、その中で新しく取り上げられた一つに全国の市町村に地域福祉計画を立てなさいというのがあります。地域福祉計画とは何かといいますと、国の力を頼ることはもちろん大事ですが、それ以上にまず、それぞれの住んでいる地域の中でお互いに協力し合って、そして助け合ってという、そういう組織づくりを改めて取り組んでいこうではないか、それには地方自治体が中心となつて計画を立てなさい、ということなのです。ところが地方自治体がいくら話しをしようとしても、なかなか住民の人がそれに参加するということが難しいのが現実でございます。そうすると、もつとそれぞれの地域の生活圏の中で我がまちをどういう風な形でつくっていったならば、みんなが安心して老後を迎えられるようになるだろうか、ということと相談する。そしてそれを具体的に計画につなげていくというような働きが求められてくるわけです。ですから市町村の自治体は、地域福祉計画を立てる、それに平行して地域の住民で地域の計画を立てるといのが実は、今日本の中で、福祉の領域の中でさかんに検討されているということです。しかし役場の方以外にその地域の中で計画を立てるためのリーダーになる方がいないとなかなか進まないわけであります。町長さんが、一生懸命各地域をまわつてそういう活動をしてみましょうといいますが、やりましょうという方がいませんと、難しい。阪神大震災がありまして、ちょうどその十年目だということでテレビでも大震災の大きさと、影響の大きさと、いろんな方々が大変な苦勞で立ち上がつていった姿を報道していましたが、災害があつた時、それは中越地震でもそうでしたけれども、お役所の力がでてる。静岡でも関東大地震があるということで、いろんな備えの支度をやっております。その中でも最小限三日間は自分で食える、水、米というものを用意しておかないと、ダメですよ、飢えてしまいますと、盛んに言つ

ております。これは大きな我々の生活上のテーマで身延町も例外ではありません。そうすると、地域の中でもし何かあった時に協力し合う。助け合うという意味合いの地域福祉の計画を立てるというのは、今我々のどの地域でも共通のテーマにならざるを得ないのです。と、そういう地域福祉計画を立てるときに、誰がリーダーになれるかというところが、大きなテーマでありますけども、それにお答えするのにどこの集落に行ってもあるのは、仏教のお坊さんと寺院。そのお寺さんが地域の中で、お坊さんが主役を演じて地域の暮らしを良くするためにどういう計画を立てましようか、ということをも具体的に発言し、提案をしていただける体制が出来ましたならば、それは素晴らしい、本物の地域計画が立てられるのではないかと、寺院はコミュニティセンターと認めてあります。

（寺院はコミュニティセンター）

実は、福祉の領域では淑徳大学という大きな役割を担っている大学でありますけども、その大学をはじめた長谷川良信さんというお坊さんが、おっしゃっていた言葉がございます。「お寺というのは、地域社会の中心とならなければならぬ、コミュニティセンターとなれ」です。ご自分のお寺を解放していろんな福祉活動を展開していく中で大学まで発展していくのです。長谷川さんが今おられたら、地域の中にいるお坊さん方が、福祉の領域で地域福祉計画を立てる主役でなければならないと言われるように思うのです。そういう期待からも僧侶の資格と社会福祉士の資格を持つお坊さんが本学から誕生すると有難いなあとというのが、今日申し上げたいことの一つです。それからもう一つは、新しい在宅サービスの創造ということを挙げさせていただきます。介護保険法というのは、日本中どこについても受けられる福祉サービスを提供するという法律でございます。身延町なら身延町にその地域の特性に応じたサービスというのは、その上に上乗せをしないと本当に住み良い身延町にはならないのです。行政は介護保険法等法律の運

用で精一杯であります。身延町にふさわしいプラスアルファのサービスというものを、誰が提供するか。ということです。大都会でありますと、今民間事業がたくさん進出しているわけですが、山間地域ですとなかなかそうはいかないのです。今まで福祉の仕事というのは、社会福祉法人でなければならぬというのが国のルールでありまして、ですから今までお寺さんがやっていた保育所も宗教法人ではだめ社会福祉法人でなければならぬ、となっておりまして。どこのお寺さんも宗教法人としての寺院と、もう一つ社会福祉法人である保育園両方の理事長さんをされてるような形で、やってきたのが今までの経過です。ところが最近、間に合わないから、社会福祉法人以外の法人が、やってもいいですよ、という風に、いわゆる規制緩和の流れになります。そうするとどうなるか、宗教法人も、公益事業が営むことが出来るし、むしろ慈善・博愛といったような活動は、宗教法人の公益事業にふさわしいものであるという風に私は認識しております。そうすると、町の行政で提供出来るサービス以上のものは、これから宗教法人に期待出来るのではないか、という意味合いで申し上げているわけです。日蓮宗新聞にもご自分のお寺の台所を利用いたしまして地域のご婦人の方々に呼びかけて給食サービスをはじめました、という記事がございました。素晴らしいですね。「地域の中で障害があつてなかなか買い物にも行けないという一人暮らしのおばあちゃんの所に、お寺さんの台所を利用してそこでみんなでお昼のお弁当をつくる。そしてそれをお届けするついでにお話もしてくる。ということをやることによって、三食のうち一食だけは、人様のつくっていただいたもので食事が出来る、しかも地域の方とお話出来ると、大変喜ばれております。」というのが内容でした。これだ、とこういうことをお寺さんという場を利用して、そしてお坊さんたちが中心になって地域の求められているニーズに応えられるような、お年寄りや障害や子供たちのためのサービスを具体的に形にかえたとりくみ、これは宗教法人の領域であります。

へ小池政恩の先駆的取り組みへ

静岡県三島市に玉沢妙法華寺、古い日蓮宗の本山があります。その先代のお坊さんが小池政恩さんというのです。五〇年も前のことですけれども、私が学生の頃にお伺いして、うかがったことは、農繁期保育所をはじめたこと、境内を利用して一生懸命地域の中で貢献していった。さらに子供や孫から相手にされないお年寄りを「お寺にいらつしやい」とよびかけて、一緒に話し合いをし、色んな活動を老人福祉のデイサービスといわれる活動をしてきたことです。地域のお年寄りがみんな、「それじゃあ、妙法華寺に行こう」ということで広がりました。バス会社もバスをしたって妙法華寺まで行き、の便を用意するというくらいまで発展した、それが地域老人ホームといったかたちで今の法的な施設サービスにまで広がった。小池さんのようなお坊さん、自分のお寺を解放して地域のお年寄りと社会に出来ることをやろう、というようなことをよびかけられるお坊さんが実は我々の先輩におられるわけです。これから宗教法人でもそういう分野の仕事も出来るんだあという私なりに認識しております。それで、そういう触れ合いに対して力をいただけるのならば、まさに介護保険法の上乗せが出来る、それが豊かなくらしにつながるということです。国の制度で出来ない分野をみんなの助け合いで協力し合って生きていかなければならない。これが今の高齢社会の我々の使命です。そうすると、その中で誰が動き出すか、ということでは誰かが主役になって行動しませんが、うまくいかないという現実があります。日本の地域社会の中の特に福祉の領域では、今問われているテーマであるかと存じます。そうするとこれは、お寺さんに期待するのが一番といえます。本学を出て行かれるお坊さんの方々には地域の中に根を張る、そしてそういう悩みをもつ弱い人たちのために役割を担っていただきたい。これが私のささやかな願いでございます。本学は、日蓮宗のお坊さんを養成する本当に大事なお役目を担っているわけですから、

そういう分野に役割を担っていただければ有難い、ということを再三申し上げた次第でございます。さらに、仏の心を持った福祉の職員を養成していくのことを申し上げたのですけれども、今福祉の領域では、一三〇校を数えますほどの福祉の大学が出来ました、と申し上げましたけれども、どの学校も技術的には専門ですけれども、本当に親身になって年寄りのお世話をするという心の面においては、もう一つのところがあるように思われます。私も老人のホームの施設長をしていて思ったのは、給料をもらうためにやる、という人よりも、私は年寄りが好きだから、この仕事が好きだから、この仕事が自分の生きがいだからこの仕事をやる、というような気持ちが溢れている方をやっぱり私は大事にしたいと思いました。そういう方々がこれからますます大事になると考えます。そうすると、年寄りをお世話することが好きだと言える人、人のお世話をすることが生きがいだ、楽しい、と言える人というのはどういった方なのでしょう。福祉の勉強をしたということももちろん大事なのですけれども、それ以上に人間というものゝの値打、やっぱり仏教で言われているように山川草木すべて命を持っている尊い仏の表れなんだ、まして人間であるならば誰でも平等であり、みんな仏の子なんだ、という風に仏教では教えていただいているんです。そうすると自分と同じ仏の子である人間のお世話を、させていただくというのは、仏の心が大事なポイントとなってくるのです。なかなかこれは難しいことです。実際に各大学から実習に見える学生を施設では何人も受け入れていきますけれども、やっぱり差が出てきます。本当に年寄りが好きだというかたは、すうっとお年寄りの間に入っていきます。これは学校の実習だからしょうがない、というような顔をしている方々はなかなか年寄りの間に入っていくけない。寝たきりの年寄りに頭はしっかりしていますから、その方々がどういいう人間かというのは分かります。ボケていても、そういう年寄りにきちんと受け入れてもらえるような方というのはやっぱりその方の心の心に豊かなもの、あたたかいものがある、と

いう形が大切です。そうすると仏の教えというものをこの学校でしっかり身につけた上で、保育なり介護なりの技術を学びとる。ということになりますと、そういう現場の期待に応えられる、本当に年寄りから好かれる寮母さんなりが出てくるのではないかと。そのへんが今福祉の業界では大変求められながら、なかなかそれに応えられる方々がないということ言われているのです。先程から申し上げましたけども、仏教福祉学科という意味合いを私はとても大事にしたいと。単なる福祉学科ではないという、決してノウハウを教える、技術を教えるだけじゃないという、その前に人の命を大事にする仏教の考え方がきちんとあるという意味合い、これが学生の中に身についた上で専門の勉強をしていただきたい、そうしなければ他の福祉専門学校に負けない、特徴のある学校になる可能性を秘めているのではないかと私は思います。これからこの本学を支えてくださる先生方に仏教系の方、それから福祉系の方々も含めて一緒にあって、新しい仏教福祉学科というものを構築していただく、その特徴を活かして現場で喜んで受け入れてくれるような人材を養成していただくということを心から期待したいと思います。

へ地域にひらかれた図書館に

私がこの学校でお世話になって嬉しかったことは、一つは先程も中山先生からお話がありましたように、図書館のお手伝いをさせていただいたことです。私なりに思ったのは地域に、開かれた図書館です。学生と先生のための図書館の役目もちろん大事ですけども大学が存在する地域の方にも理解し、評価をしていただける図書館というようなことで色々工夫をしたことがあります。その中で沼田さんが大変頑張ってもう三回になりますけども、図書館に所蔵されている資料を利用しての展覧会・展示会を開いたことです。それからもう一つは一昨年になりますけども藤井日光法主祝下の本が出来ました。この『石中の火・木中の花』素晴らしい法主祝下の評伝、この評伝が出来たと伺いま

して、是非この記念展示会をやりたいということで再三、本山の方へお願いをいたしました。結果的には図書館ではなくて本山の宝物館で一年に亘って「日光展」と申し上げているのですけれども開くことが出来たというのは大変嬉しかったわけです。その評伝の中で大変色んな法主猊下のご苦労が書かれてありますけれども、特にこの中で、「あー、素晴らしいお話だなあ」と思ったのは、猊下が北陸の地のお坊さんをやられた時に、地域の中でゴミ捨て場になろうという風に心配された霊地を仏の世界を守りたいと一生懸命祈りをささげ、それが地域の方に認められてゴミ捨て場ではなくなっていくのです。法主猊下の行動を通して成果に繋がったということが、この本にある仏教が周りの方を感化して、そして日本の国を平和にしようというような願いを込められた行いをされた法主猊下というのは素晴らしい行いをされた方だと、少しでも我々が学べるなと思って、評伝の記念展を企画したわけであります。幸いにしてみなさんから高い評価をいただいて大変嬉しいと思ったことも図書館にお役目いただいた中で喜びであったということも申し上げました。この学校でお世話になった間に今、申し上げたようなことを私なりの文章にいたしまして、『論叢』や『学部紀要』などに書かせていただきました。それをまとめてまして望月真澄先生のお力をいただいて一冊の本になりました。それには、『仏教と社会福祉』という題名をつけさせていただき、間も無く印刷が出来てくる予定であります。この学校に仏教福祉コースが出来たらば、是非こんなお心でという願いを込めております。新年度からは、具体的に花を開くということの実際になったことを大変嬉しく思います。日蓮聖人が長いこと修行されたこのお山でお勉強することだけで、これは大変素晴らしいことだと私は思います。

#### 〈実践第一の仏教福祉学科を〉

ですから是非お願いは、実践第一の仏教福祉学科を、ここのお坊さんになる方々が学校で学びながら本山で実際の

修行が出来る、この素晴らしいメリットを福祉コースの方にもそういう機会を与えていただきたいのです。規定によりますと、一年間は机で勉強して二年になったら実習に行きなさい、となっています。二年生から実習に行ったのでは間に合わないのです。まず現場で体験して年寄りと触れ子供と触れ合ったその体験をまずして、その上で自分の問題意識をもって教室に望む、ということではないかと、一年間がどうしても無駄になります。ですから是非四月から入ってきた新しい学生さんに年寄りや子供に日常的に触れ合うような場を是非ご用意いただいて、子供が好きだ、年寄りが好きだ、と本当に口から言えるような、そういう体験というものがきちんと一年の時からやって、その上で実際に必要な学びをする。そのことを基礎に二年から実習に励めば、身延山大学の学生は一味違う、姿勢が違う、年寄りを見る目がちよっと輝いているというような、評価をしていただけたと思いますので、是非一年の時から仏教系の学生さんと同じように具体的な現場を体験出来るということの色々工夫いただきたい。幸いにして本学のそばには身延荘がございます、色んな福祉の施設や保育園、そういう場に学校授業が終わったら、飛んで行ってそこで子供や年寄りたちと一緒に暮らすようなことがあってもいい、是非実践といえますか体験といまして、そういう部分を大事にすることを一年生の頃から考えていただけますと、有難いなあ、というのが私の大学へのお願いです。そんな形で地域の方に喜ばれ、そして本当に年寄りが好きだという学生さんがいるならば本学のこれからの新学科は期待出来る、将来に大きな夢をもつことが出来るのであります。最期に実は私の妻の父親は、教員でありました。校長先生もやられましたけれども、教員という役割に大変喜び使命感を感じておられ、私が公務員でありましたが、先生はえらいんだ、と再三言われていました。大変抵抗を感じていたわけですけども、本学に参りまして教員の中に加えていただいた。その中で感じたことは、自分の体験したこと、自分の思ったことというものを次の世代の方々に伝える

ことが出来る素晴らしいことだと。つくづく先生って良い商売だなあと思わせていただきました。その上に給料もいただけるのですから、こんな素晴らしい仕事はないなあと思いました。考えてみると、お坊さんという仕事もそうなんです。人様の指導をし、お世話をし、そしてまた布教しお役にたつのですから、お坊さんという仕事も学校の先生に比べて劣らない立派なお仕事だと思いました。本学がそういう意味でお坊さんを養成し福祉の人間を養成する、素晴らしい意味合いの職場を用意されているわけです。教員の仕事もみんな人間を相手にするお仕事、私も何年間かこの大学でお世話になったことを大変有難いと思います。妻の父に言われたこと、やはり学校の先生って良い商売だなあとつくづく思っているこの頃であります。この学校とこれからも関わりをもたせていただけるといことでございますので、大変嬉しく思っているわけです。どうか新学科が今申し上げましたこと含めて地域の期待に応えられるような福祉士、それから福祉に強いお坊さんという養成に先生方のお力をいただいて身延山大学が素晴らしいという風に褒めていただけるような学科になることを心から期待をしたいと思っています。

何度も申し上げます。福祉の仕事っていうのは、まだまだ3Kの仕事です。お金も安いし、汚い仕事だけれども、この仕事の中に生きがいを見つけ、そして前向きに生きていける職員がなかなか得にくい、というのが現状です。その中でぜひこの学校で学んだ学生さんは、そうではない、やっぱり違う。と言えるように仏教福祉学というものをしっかりともっていただきたいですけども、是非本学の先生方にその心の部分をどういう風に磨いて現場の期待に応えられるかを狙い目において教育にあたっていたら、そうすれば他の大学から身延山大学に見学に来るようなことになるのではないのでしょうか。静岡県にも福祉系の大学が三校開かれています。その三校とも専門の勉強をされている先生方が一生懸命教えておりますけども、今申し上げた福祉の心というのは、もう一つのような気がします。

その福祉の心を仏の心と重ね合わせて、ある意味では共通のものとしていただいて仏の心をしっかりと持っている人間ならば、こういう人間になるのではないか、ということを具体的に先生方から、理想像を描いていただいて、それを学生さん方に伝えていただくことが出来ますならば、これは現場の期待以上の方が生まれてくることは間違いないと思っております。幸い私もお付き合いさせていただきました本学の仏教系の先生方はみな素晴らしい人格者であり、素晴らしい仏教の教養をお持ちになっている方ばかりです。そういう方々に先程も申し上げましたように福祉の分野に関心を持っていたら、福祉の分野もみるということを積極的に発言していただいて、いわゆる仏教福祉学科というものを、みんなの力で構築していただければ、これはもう素晴らしい学生さんが出来るのではないか。平成三年から関わらせていただいて、ようやく今日、具体的な姿になった本学の新学科というのは、私としましても大変嬉しく思っています。

今日もこういうありがたい機会を与えてくださったのは、大変感謝であります。どうか私の願いを少しでも受け止めていただきまして、光輝く身延山大学になることを願っています。今日、たくさんの方たちにお見えたいただいたに充分お話出来たか分かりませんが、ゼミで担当させていただいた松浦さんのお母さんも大阪からわざわざおいでになられました、ありがとうございます。おくりあわせのうえおいいただいた皆様にお礼を申し上げます、今日の私のお話を終わりにさせていただきます。ご清聴、ありがとうございます。